

夜間中学校の現代的意義についての考察 —世田谷区立三宿中学校と「川口自主夜間中学」を事例として—

南角 建人*

1. 本研究の目的

本論文の目的は夜間中学校の存在が現代でどのような意義を果たしているか示すことである。夜間中学校は創設時から「基礎教育としての義務教育を保障する場」としての理念を持ち続けてきた。その存在基盤を支えてきたのは教育を求める声と教師や市民の熱意、好意である。そのため、その基盤を堅実なものにするために「法制化」されることが望まれてきた。2014年現在、文部科学省は夜間中学校の設置に前向きである。

だが、その一方で夜間中学校が義務教育であることを認めず、夜間中学校の設置に反対する地方自治体も存在する。そのため私は夜間中学の現状を調べ、夜間中学校が担っている役割を明らかにし、そこから現代的意義を考察したい。

2. 構成

序章 本研究の目的と方法

第1章 夜間中学校の設立と理念

第1節 夜間中学校設立に向けての教員の想い

第2節 夜間中学生の声

第3節 生徒の多様化と夜間中学の対応

第2章 夜間中学校の現状と抱える課題

第1節 公立夜間中学校の現状

第2節 自主夜間中学校の現状

第3章 実地調査を通して

第1節 世田谷区立三宿中学校への実地調査

第2節 川口自主夜間中学への実地調査

第4章 現代社会における夜間中学校の意義

第1節 基礎教育の場として示唆を与えること

第2節 義務教育要求の声を反映すること

第3節 教育の本質を問うこと

終章 本研究のまとめと今後の課題

* 筑波大学人間学群教育学類4年

3. 概要

第1章では生徒の質や国の意向が変わっても、「基礎教育としての義務教育を保障する」理念は変わらずに存在し続けたことを示した。そのために夜間中学校の社会的位置づけが大きく変化した設立期、減少期、日本語学級開設期について文献研究を行った。そして義務教育未修了者の教育要求の声に善意の教師が対応してきており、現代でも夜間中学校は生徒の変化に合わせて授業方法を変え、対応していることを明らかにした。

第2章では現代の夜間中学校の活動を調査し、生徒により感じる役割が異なることを示した。公立夜間中学校は新渡日生徒の増加している。そのため義務教育の戦後処理的役割が減少し、進学を前提とした基礎学力の育成を行う役割を担っている。自主夜間中学は生徒を主体とした学びを保障するボランティア組織である。現在、義務教育未修了者や公立夜間中学校卒業者の基礎学習の場となっている。そのため公立夜間中学校と自主夜間中学が連携することで学びたい人への実質的な教育の保障を行える可能性を示した。

第3章では世田谷区立三宿中学校に通っていた新渡日生徒と「川口自主夜間中学」の生徒、スタッフにインタビュー調査を行った結果からの考察を述べた。三宿中学校の元生徒の話から、三宿中学は新渡日生徒を主体にし、進学するための学力を保障すべく日々活動していることが判明した。しかし、昼働いている生徒が在学中に進学に必要なとされる学力の習得は難しいので勉学へ意欲を持たせる指導と学外でも学べる場所の必要性を指摘した。また川口自主夜間中学の生徒、スタッフの話から川口自主夜間中生徒の基礎学力保障と精神的な支えになっていることを指摘した。そのため公立夜間中学校と自主夜間中学が連携することで基礎学力の保障、学び直すための意欲の回復を見込めると結論づけた。

第4章では1～3章の調査結果から現代の夜間中学校の意義を「基礎教育の場として示唆を与えること」「義務教育要求の声を反映すること」「教育の本質を問うこと」とし、考察を行った。日本語支援を例に取り、多文化共生を行う上で日本語教育、生活者としての知識の習得について夜間中学の教育状況から学ぶ必要性を指摘した。また、現代も義務教育要求の声を反映した活動を行っているため、義務教育修了、未修了問わずあらゆる人へ「学習権」について考えなおす機会を与えている。夜間中学生の声や夜間中学関係者の声を通じて夜間中学の必要性だけでなく教育について考える人々を紹介し、夜間中学の存在が影響を与えていることを示した。

4. 主要参考文献

浅野慎一「ミネルヴァの鳥たち 一夜間中学生の生活と人間発達」『神戸大学院人間発達環境学研究科研究紀要第6巻第1号2012』、2012年

松崎運之助『夜間中学—その歴史と現在』白石書店、1979年

第60回全国夜間中学校研究大会事務局『第60回全国夜間中学校研究大会資料』、2014年